天德夫人小傳

11
180

始

11-580

天德夫人小傳

大正
11. 7. 4.
内交

書經閣章

しあはきなのよ　ゆまし
こゝつく
おもひしる　みを
うらみぬ　あまり
かしこき　ある

天德夫人小傳目次

前田侯母堂題詠
天德夫人年表
第一章　序說……一
第二章　天德夫人生る……六
第三章　德川氏前田氏を伐たんとす……二八
第四章　兩氏の和親……三四
第五章　天德夫人の入輿……四三
第六章　良妻賢母……五〇
第七章　薨去……六四

插畫目次

一、天徳夫人芳春夫人に呈せられし書翰……一
一、天徳夫人玉泉夫人に呈せられし書翰……五〇—五一
一、利常卿大坂役の戰捷を報せられし書翰……五四—五五
一、野田山の墓……六四—六五
一、金澤天德院……六八—六九
一、頌文雜句……七〇—七一
一、高野山天德院……七四—七五

天徳夫人年表

慶長四年	己亥	一歳	三月夫人伏見に生る冬徳川家康利長卿の臣横山長知に夫人を卿の嗣子利常卿に配せしむることを約す
同五年	庚子	二歳	九月二十日利長卿家康に大津に會し客歳約婚の盟を尋む
同六年	辛丑	三歳	七月朔夫人來歸す
同七年	壬寅	四歳	
同八年	癸卯	五歳	
同九年	甲辰	六歳	
同十年	乙巳	七歳	六月廿八日利長卿老し利常卿封を襲ふ

年	干支	年齢	事蹟
同十一年	丙午	八歳	
同十二年	丁未	九歳	
同十三年	戊申	十歳	
同十四年	己酉	十一歳	
同十五年	庚戌	十二歳	
同十六年	辛亥	十三歳	
同十七年	壬子	十四歳	
同十八年	癸丑	十五歳	三月九日長女龜鶴君生る

年	干支	年齢	事蹟
同十九年	甲寅	十六歳	五月二十日利長卿高岡に薨す六月芳春夫人江戸より金澤に歸る十月大坂冬の役起り利常卿軍に從ふ
元和元年	乙卯	十七歳	四月大坂夏の役起る利常卿再び軍に從ふ十一月二十日長男光高朝臣生る
同二年	丙辰	十八歳	是年次女小媛君生る三月利常卿駿府に赴く四月家康薨す
同三年	丁巳	十九歳	四月廿九日次男利次君生る五月將軍秀忠我か辰の口邸に臨す六月利常卿將軍に陪し京都に朝す七月十六日芳春夫人金澤に薨す
同四年	戊午	二十歳	
同五年	己未	二十一歳	十二月十五日三女滿君生る
同六年	庚申	二十二歳	金澤城災す
同七年	辛酉	二十三歳	正月二日四女富君生る五月世子光高朝臣次子利次君江戸に如き將軍に謁す

同八年	壬戌	二十四歳	三月三日五女夏君生る夫人因て疾を獲たり七月三日遂に薨す八月八日葬禮を行ひ遺骨を金澤及高野山に分瘞す

天德夫人芳春夫人に呈せられし書翰

天德夫人壽を享くること長からす、且つ薨するに先つ一年有半金澤城災し夫人の居館に延燒して殆んと一物を留めさるを以て、今前田家に存する所の遺墨は僅かに書翰二通あるのみ、而して倶に嫡孫綱紀卿の訪搜して採集せられしものに係れり、本書は即ち其一にして、慶長十九年、芳春夫人江戸より金澤に還られし後、夫人と倶に城内に住み、日夜往來して歌書物語の類を繙讀せられし際、夫人の之に呈せられしものなり、芳春夫人は元和三年薨せられしを以て、本書は天德夫人年十六より十九に至る間の揮毫に係ることを推知すべし、其筆翰の精妙、辭令の嫻都なる、以て夫人品性の優雅なる一斑を闚ふに足らん。

天德夫人小傳

近藤磐雄編

第一章 序説

慶長三年八月關白豐臣秀吉薨す。子秀頼立つ、年僅に六歳。是より先き、秀吉大老奉行の制を定め、特に德川前田の兩氏に遺囑する所あり、略々身後の計を爲す、而して豐臣氏の覇業、其基礎未た固からす、群雄對峙、間々隙を窺ふものあり。秀吉新に薨するや、五大老中、德川前田の兩氏官位最も高く、權勢伯仲し動もすれは相軋らんとす。新進石田三成の徒亦間に乘して起り、人

心恂々海內亂を念ふ。四年利家卿薨し、政柄頓に德川氏に歸す。家康素より大志あり、機に乘して四海を統一せんと欲し、首として先つ手を前田氏に著く。

蓋し前田氏の德川氏に於ける、邦を成して富强の盛、彼に及はす、土を拓きて彊宇の大、彼に及はす、官を命し秩を定められて禮數の優、品階の崇、亦皆彼れに及はすと雖も、但た利家卿資性純厚、信義を重んし、故舊に敦く、人の爲めに謀ること尤も忠なり、此を以て諸侯伯の推服する所となり、威望隆然海內を壓す。加ふるに島津義弘、伊達政宗等事を以て深く卿を德とし、蒲生氏鄉、浮田秀家、細川忠興、淺野長政等夙に卿と通婚して、誼、父子昆弟の如し、故に假令し公に假すに年壽を以てせんか德川氏の雄圖其の成るなきに終るや固より疑を容れさるなり。

當時の情勢斯くの如し。故に利家卿の訃音一たひ德川氏に達するや、其君臣必すや好機逸すへからすと爲し、案を擊つて歡呼し、結束して起ちしは、亦固より燎を見るか如きのみ。卿薨して後未た幾はくならすして家康頻りに前田氏を挑撥逼迫し、尋て諸侯に檄して兵を擧けて來り伐たんとするに至る、其方策、其一年の後に上杉氏に施せしものと殆んと符節を合すか如し。

當時前田氏和戰の二論あり。利家卿の室芳春夫人賢にして勇あり、素より秀吉の室杉原氏と親く、倶に豐臣氏故舊の諸將の景仰する所となり、利家卿に從ふて大坂城內に在り、今尙ほ止

り住す。卿の第二子利政君別に能登を領す、利家卿在時嘗て家康を刺さんと欲す、是に至り亦た大坂に在り、芳春夫人と志を同ふし、固く利家卿の遺命を奉して豊臣氏を擁護す。前田氏の宿將亦た戰を主とするもの多し。獨り利家卿の長子利長卿、重厚にして善く慮る、又た德川秀忠と極めて親善なり。家康難を我に構ふるに及んて心を勞すること極めて甚し。戈を執て起んか勝算必すしも期すへからす、且天下の大亂を惹起するを奈何せん、強て隱忍せんか母弟宿將皆之を非とし、德川氏の眞意亦容易に測る可からさるものあり。今よりして遡つて當時の事を察するに、興敗の機實に間髪を容れす、前田氏の前途其危きこと風前の燈の如し。不幸にして身此時に處し、一刀兩斷、

以て其嚮背を決せさる可からす。是れ公の位地たる豈亦重且難ならすや。

此時に際して偶々天德夫人の生誕するあり、百難由て以て一時に解くるを得たり。恰も雲霧を拔きて再ひ天日を睹るの概あり。嗚呼渺々一少女の力も亦偉なりと謂ふへき哉。

第二章　天德夫人生る

天德夫人名は珠子、小字子々姫、或は禰々姫に作るものあり、加賀藩主第三世贈從二位權中納言前田利常卿の正室なり。慶長四年三月伏見城内に生る。父は征夷大將軍德川秀忠、母は贈從一位崇源夫人淺井氏、近江國小谷の城主淺井備前守長政の女なり。長政三女あり長、茶々、秀吉の側室となり淀君と稱す。次、京極高次に嫁す、季即ち崇源夫人なり。

崇源夫人所出二男五女皆世に顯る。長男家光、秀忠の後を襲き征夷大將軍に任す。次男忠長駿河遠江甲斐三國に封せられ、從二位に叙し、權大納言に任す、後ち兄家光の迫る所となり自殺す。長女千姫右大臣豐臣秀頼に嫁す。次女珠姫即ち天德夫人たり。三女勝姫越前國主松平忠直に嫁す。四女初姫若狹國主京極忠高に嫁す。五女和姫後水尾天皇の女御となり、後ち立ちて中宮となり、號を東福門院と上つる。別に異母弟保科正之等數人あり。

德川家康 ― 德川秀忠（室）

淺井長政・小谷の方（織田信長の妹にして長政死後三女を拉し柴田勝家に再醮す）
― 淀君
― 京極高次室
― 崇源夫人（德川秀忠室）

(一)千姫
(二)天德夫人
(三)勝姫
(四)初姫
(五)家光
(六)忠長
(七)和姫

参照

德川家嫡庶譜略

秀忠公

御幼名長丸　竹千代

天正七年四月七日於濱松城御誕生

寛永九年壬申正月二十四日薨五十四歲謚台德院殿興蓮社德譽入西大居士

葬增上寺（御別當惠眼院實松院）

御父　家康公

御生母　西鄉氏

西鄉彈正左衞門清員養女於愛方昌子實戶塚五郎大夫忠春女

天正十七年己丑五月十九日於駿府逝三十八歲法名龍泉寺殿松譽貞樹大姉

葬駿州龍泉寺

後改稱寶臺院殿改寺號稱寶臺院

御臺所　淺井氏

江州小谷城主淺井備前守長政卿女惠登姬宮姬達子德子

元龜三年九月（一に八月とす）誕生初佐治與九郎一成室豐臣秀吉公爲御養女丹波中納言秀勝卿（武家領知大概に曰く丹波宰相秀勝は織田信長公の四男豐臣秀吉公の養子）室文祿二年秀勝卿逝後同四年御緣組（秀忠公）

同年九月十七日伏見城に御入輿

慶長十八年江戶江御入

寛永三年九月十五日薨五十五歲

御法名崇源院殿昌譽和興仁淸大禪定尼增上寺に葬

同年十一月廿八日贈從一位

同年十二月增上寺備位記御別當最勝院

〔由〕台德公御臺樣崇源院樣大閤秀吉之養女實淺井長政女初は丹波少將秀勝（江）嫁又九條道房（江）嫁後台德公御臺樣寛永三寅年九月十三日御逝去

〔祭〕稱於江與之御方淺井備前守長政女

〔泰〕文祿四年九月十七日御婚禮（豐臣大閤養女諱末に出す）

〔泰〕御臺所は贈中納言長政卿息女（越前小谷の城主淺井備前守事也）御母は織田右府（信長公）の妹御臺所御諱は達子（或云於江與と稱）後年大御臺所と稱し奉る豐臣大閤秀吉公に養はれ給ひ文祿四年九月廿七日伏見城へ御入輿寛永三年九月十五日薨御年五十四增上寺に御葬送崇源院殿と稱し奉る同年十一月從一位を贈らる同九年九月御父長政卿に正二位中納言を贈らる

御長女（御母崇源院殿）

一千姬

慶長二年四月十一日於伏見誕生

豐臣內大臣秀賴公へ御緣組大坂御入輿後本多美濃守忠則へ御再緣御入輿落飾稱天樹院殿竹橋御殿御住居

寛文六年（丙）午二月六日逝七十歲

法名天樹院殿榮譽源法松山大姉

葬小石川傳通院又建廟塔于總州飯沼弘經寺

〔泰〕慶長二年四月十一日長女千姬君生（御母堂は御臺所）慶長八年七月廿八日豐臣內大臣秀賴公（江）御入輿元和三年九月再緣本多中務大輔忠則後稱竹橋御殿寛文六年二月六日逝諡天樹院殿葬小石川傳通院

[由]台徳公御嫡女天樹院様千代姫君慶長二酉年於伏見城御誕生御臺様御腹同八卯年七月廿八日豊臣秀頼公江嫁伏見より大阪に御入輿大阪落城後元和四午年七月廿一日本多中務大輔忠則に再縁忠則卒去後寛永三寅年十二月六日落飾竹橋御殿に御入稱北之丸様寛文六午年二月六日於同所御逝去御年七十一傳通院に葬

御二女（御母崇源院殿）

―子々姫（珠姫）

慶長四年三月　日誕生

松平肥前守利常（加賀中納言）（前田）へ御縁組御入輿

元和八年壬戌七月三日逝二十四歳

法名天徳院殿乾運淳貞大姉

葬加州金澤小立野建天徳院

[祭]小松中納言利常卿簾中

[泰]慶長四年月日子々姫君生御母堂御臺所

慶長六年五月十一日小松中納言利常卿御簾中元和八年七月三日逝

諡天徳院殿葬加州金澤天徳院

御三女（御母崇源院殿）

[由]天徳院様五之姫君元和八未年三月三日誕生

―勝姫

慶長六年五月十三日誕生

松平三河守忠直卿（秀康卿子）御縁組御入輿

寛文十二年壬子二月廿一日逝七十二歳

法名天崇院殿穩譽泰安豐壽大姉

葬愛宕下天徳寺後改葬越後國高田長恩寺

[祭]十二日生越前宰相忠直卿簾中後稱高田御殿寛文……逝去葬天徳寺

〔泰〕慶長六年五月十二日勝姬君生（御母堂御臺所）十六年九月五日越前宰相忠直卿簾中後稱高田御殿寛文十二年二月廿一日逝諡天崇院殿葬天德寺

御長男（御母不詳）

長丸（ヲサ）

〔系〕慶長六年六月二日誕生
慶長七年壬寅九月廿五日逝二歲
法名秋德院殿美嶺容心大童子
葬增上寺（御別當源興院）

〔泰〕慶長六年二月日長丸君生（御母未詳）
慶長七年壬寅九月廿五日逝諡秋德院殿葬增上寺（御別當源興院）

〔由〕秋德院殿蝶丸君又長松君とも云御母御臺樣

御四女（御母崇源院殿）

初姬

慶長七年七月　日誕生
京極若狹守忠高と御縁組御入輿
寛永七年庚午三月四日逝廿九歲
法名興安院殿豐譽天晴陽山大姉
葬傳通院

〔祭〕同議

〔泰〕慶長八年七月初姬君生（御母堂御臺所）
京極若狹守室寛永七年三月四日逝諡興安院殿葬傳通院

御二男（御母堂崇源院殿）

家光公　御幼名竹千代
慶長九年七月十七日御誕生

御三男

忠長卿　御幼名國松丸國千代

慶長十一年六月朔日誕生
稱駿河大納言
寛永十年癸酉十二月六日於上州高崎生害二十八歳法名峯巖院殿晴徹曉雲大居士
葬上州高崎大信寺
又稱慶芳院殿
〔祭〕國千代君御譜明細なり
〔由〕光松院殿駿府忠長公御簾中織田兵部少輔姉御生害後竹橋御殿に御入剃髪北之丸殿
〔泰〕元和六年御城北之丸建
寛永江戸圖を按に竹橋御門内なり駿河大納言忠長卿御住居なり忠長卿は台廟御二男御幼名國松君元和三年信州小諸城十一萬石後屢御加増叙任等有て同九年七月從三位中納言寛永元年八月駿遠兩國五十五萬石同三年八月權大納言同七年故有て甲州江御蟄居後高野江御移同九年十二月六日同所大進寺に逝去二十七
〔注〕同所大進寺とあるは誤なり前にも高崎大進寺とあり而して亦進は信の誤なり
〔泰〕慶長十一年五月七日忠直卿生
國千代君駿河大納言御母堂御臺所
寛永元年八月封駿遠甲信之内
八年九月國除九年十二月六日逝諡峯巖院殿葬上州高崎大進寺

御五女（御母崇源院殿）

和姫 和子

慶長十二年十月四日誕生
入内女御後中宮宣下
延寶六年戊午六月十五日崩七十二歳

奉稱東福門院皇太后源和子

葬京都東山泉涌寺

〔祭〕御譜明細なり

〔泰〕寛永元年十一月八日女御和子中宮に立せ給ふ

〔泰〕元和六年六月十八日第五の姫君入内後水尾院女御御諱和子慶長十九年四月入内宣下元和六年五月八日江戸御發輿同廿九日御入洛六月十八日御入内女御同九年十二月十九日御產明正院降誕是より國母様と稱し奉る寛永元年十二月廿八日立中宮同六年十一月九日東福門院様と稱奉る延寶六年六月十九日崩七十二

〔泰〕慶長十二年十月四日和子生

御母堂御臺所元和六年六月十八日入内女御寛永元年十一月十八日立皇后六年十一月號東福門院延寶六年六月十五日崩葬京泉涌寺

御四男（御生母神尾氏於志津方淨光院殿）

―正之　幼名幸松丸幸菊丸大助

慶長十六年五月七日誕生見性院（穴山梅雪信君後室武田信玄入道女）養ひ保科肥後守正光養子寛文十二年壬子十二月十八日卒六十二歲號土津（ハニツ）靈神以神禮葬奥州會津磐梯山建靈社是爲會津家祖

〔祭〕幸松丸君御母上尾氏葬奥州猪苗代見稱山御譜明細なり

〔泰〕慶長十六年五月七日正光君生

幸松丸松平肥後守御母於静方神尾氏寛永十二年九月十七日逝謚淨光院殿葬奥州會津淨光寺寛永八年十一月十二日賜保科家之遺領三萬石十三年七月廿一日封羽州山形城二十年七月四日轉奥州會津城承應―寛文―十二年十二月十八日逝號土津靈社葬奥州猪苗代見稱山

御養女（御實母天崇院殿）

―龜姫

實越前宰相忠直卿女
高松宮彈正尹好仁親王江御緣組宮薨去後下向越後國高田
二天和元年辛酉七月七日逝六十五歲
法名實樹院殿譽寥廓冲意大姉
葬越後高田長恩寺

(祭)御養女實御又姪實珠院樣

御養女(御實母天崇院殿)

鶴姫

實越前宰相忠直卿女
九條關白道房公へ御緣組
寬文十一年九月十九日逝五十四歲
法名廉貞院殿穠夾俊功大姉
葬越後國高田長恩寺又建廟塔于京都東福寺

(祭)大猷公御養女實御從弟達女廉貞院樣―葬京東福寺

御養女(御母崇源院殿)

某姫

實丹波中納言秀勝卿女
御母崇源院殿(秀忠公御臺所淺井氏)初崇源院殿秀勝卿へ嫁し給ふ時
之御子也
九條左大臣幸家公簾中

(祭)不載

御養女

某姫

實蒲生飛驒守秀行女
加藤肥後守忠廣へ御緣組同家斷絕之後京住明曆二年丙午九月十七
日逝五十二歲

法名宗法院殿

葬京都本國寺

御養女實御姪宗法院樣

御養女

─某姫

實池田參議輝政卿女

松平陸奥守忠宗へ御緣組御入輿

萬治二年己亥三月五日逝

法名孝勝院殿秀岸日訊大姉

葬奥州仙臺光勝寺

〔祭〕御養女實御姪

孝勝院樣振姫君

葬仙臺孝勝寺

御養女

─喜佐姫

實越前中納言秀康卿女

松平長門守秀就へ御緣組御入輿

落飾號龍昌院

明曆元年乙未六月二十五日逝五十九歲

法名龍昌院殿長譽光山秋英大姉

葬天德寺

〔祭〕御養女實姪龍昌院樣土佐姫君實結城三河守秀康卿息女毛利長門守

秀就室

御養女

─千代姫

實小笠原兵部大輔秀政女

細川越中守忠利へ御緣組豊前中津城御入輿落飾號保壽院

慶安二年己丑十一月二十四日逝五十四歳

法名保壽院殿三英紹春大姉

葬品川東海寺後改葬肥後國妙解寺

〔祭〕葬肥後熊本妙解寺

御養女

―某姫

實奥平大膳大夫家昌女

堀尾山城守忠晴へ御緣組雲州松江城へ御入輿

堀尾家斷絶後歸家昌家

慶安三庚寅年閏十月二十六日逝四十四歳

法名雲松院殿長正久大姉

葬品川東海寺

御養女

―某姫

實松平因幡守康元女

松平伯耆守忠一室忠一卒後毛利甲斐守秀元繼室

承應二年癸巳五月晦日逝

法名淨明院殿柏庭宗樹大姉

葬高輪泉岳寺

〔祭〕東照宮御養女實御姪淨明院様

承應二年六月朔日逝葬高輪泉岳寺

〔注〕右の如く祭には東照宮の御養女とせり

御養女

―某姫

〔祭〕不載

實松平甲斐守忠良女

松平右衞門佐忠之室
寛永五年戊辰七月二十六日逝
法名梅溪院殿天秀妙貞大姉
葬麻布興雲寺後改號祥雲寺

御養女
龜鶴姫

實松平肥前守(加賀)(前田)利常女
森右近大夫忠廣へ御緣組御入輿
寛永七年庚午八月四日逝十八歳
法名浩妙院殿天總日眞大姉
葬池上本門寺
(祭)大猷公御養女實御從弟達女
浩妙院様實小松中納言利常卿息女

御養女
某姫　(祭)不載

實榊原式部大輔康政女
松平武藏守利隆へ御緣組御入輿
落飾號福正院
寛文十二年壬子十月二十六日逝
法名福正院殿明譽源光惠昌大姉
葬深川靈巖寺

第三章　德川氏前田氏を伐たんとす

秀吉薨後、利家卿遺命を以て專ら秀賴の傅育に任し、兼て德川家康と力を協せて諸侯伯を統へ、海內の庶政を裁決す。卿家康と議間々合はす。尋て秀賴を奉して大坂に徙り、家康獨り伏見に留るに及て、情誼益々疎隔し、兩雄並ひ立たさるの勢あり。石田三成の徒間に乘して畫策し、二氏をして相戰はしめんと謀り、形勢日に益々急、人心恟々たり。細川忠興等之を憂へ、居中調停し、卿伏見に赴きて家康を訪ひ、家康亦た大坂に來て卿に謝し人心稍々定まる。而して卿病篤く、自から起たさることを知るや、蓐中治命の書を作りて嗣子利長卿に畀へ、具さに亂に處するの策を說き、後數日にして薨す、時に慶長四年閏三月三日なり。利長卿嗣て立つや、家康頓に鋒鋩を露はし、擅に諸侯伯に號令し、擧止甚た專橫なり、豐臣氏上下憤怒せさるはなし、然れとも力之を制する能はす。重陽の節に家康大坂城に登り秀賴母子を省す。時に訛言あり、淺野長政其徒土方雄久、大野治長等に命し、家康を營中に刺さしめんとすと。初め長政其子幸長の爲めに利家卿の女を娶り、前田氏と交極めて密なり、而して雄久は實に卿の夫人芳春君の親姪たり。是の時利長卿は家康に强要せられて國に就き、芳春君獨り大坂城中に留る。訛言德川氏に聞ゆるや、家康君臣大に愕き、戒嚴太た力む。既にして相議し、謀我れに首まるを以て、將に大軍を起し。遠く加賀に來り攻

めんとす。小松の城主丹羽長重請ふて其先鋒となる。德川氏の記錄此時の事情を叙して曰く、

德川實紀　慶長四年

重陽には久しく秀賴母子御對面なければ大坂へ渡らせ給ひぬ長束增田ひそかに淺野長政かはからひにて土方、大野なといへるを刺客として君大坂にいらせ給はむ時害し奉らんと用意するよし告け奉るよて本多正信等明日大坂城へ入らせたまふ事しかるへからすといさめ奉るといへとも井伊直政、榊原康政本多忠勝等かくては臆するに似たれはたゝ其心かまへして御入城候はんにはしかしと申にしたかはせ給ひ重陽には大坂城へいらせ給ひ秀賴母子へ御對面あり井伊、本多、榊原等をして寢殿まて進んて御側をはなれねは城中には手を出すものもなくして平らかに御旅館に歸らせ給ひぬ、されとこなたもその御心つかひせられ伏見の御人數を召ける御留守に秀康卿ゐはしけるか此城は我かくてあれは何の心つかひかあらん番頭物頭まても其局を明て片時もはやく大坂の御旅館に馳參るへしと指揮し給ふ此時卿の下知勢配りの樣聞召し君も吾には生れまさりたりとてかつ感しかつ悅はせ給ふ事なゝめならさりしとそ今度君を害せんと謀りし首謀は加賀中納言利長、淺野長政と謀を合せて土方、大野の兩人を刺客に命したる事なれは是等か罪をたゝされ後來をこらしめ給はすはかなふましと奉行等聞え上しに此事ひろくあらはに罪をたゝさむには世のさはきともなり秀賴のためしかるへき事ならすと仰られまつ長政は所領に蟄居せしめ大野、土方はそれ〳〵にめしあつけらる（是實は石田三成と長束增田等かはかりて利長、長政を陷れて失はんとす實は利長長政等は當家に親しみあれは當家親昵の徒を離間せんと計りし事いちしるけれはわさと其罪をかろくとりなさせ給ひしものなるへし）かくて奉行共に此頃諸大名多く歸國し諸有司も數少き中に日々伏見に行かよはんもさまたけ多けれは我いまより大坂の西丸に住居して萬機を沙汰せんはいか

にと仰らる長束増田等もとよりいなみ奉るへきにあらすこのまゝ大坂に御住居まし〳〵て萬に沙汰し給はむ事天下の大幸この上なしと御請し俄に故大閤心いれて構造せられたる西丸にことにことを添て修理を加へ迎へ奉れば在大坂の大小名も日々西城にまうのぼり御けしきをとるにそいよ〳〵天下の主とは見えさせ給ふかくて淺野土方等それ〳〵に御かうし蒙りしうへは利長かこと捨をかるへからすとありてほとなく加賀國へ打て下らせ給ふへしと聞ゆれは丹羽五郎左衛門長重こひ出て御先手を奉はることと世中ゆすりみちて言のゝしるにそ細川忠興はしめ故利家此かた彼家にしたしみ深き諸大名より利長のもとへ此旨をつけやるにそ利長大におとろき横山といふ家司をのほせさらに思ひよらざる旨かへす〳〵陳謝し其母芳春院を質に進らせけるにそ事なく平らきぬ(是江戸へ諸大名の證人を進らせたる起本なり)。

書中錄する所間々皮相の見に止り、史家亦た潤色する所あるものゝ如し。蓋し家康志甚た大にして、力を蓄ふること歳久しく、麾下亦謀將策士多し、巧に時勢の推移を利用して、百方四海を呑併するの策を講す。其驚くや徒に驚かす、其怒るや徒に怒らす、然る所以のもの別に在るあらさるはなし。史眼を具ふる者一見必す能く之を看破せん。

第四章　兩氏の和親

飛檄連りに金澤に到る、曰く家康將に大兵を率ゐ來り攻めんと。利長卿諸將と議し、急に兵を集め、粮を儲へ、城砦を修し、以て之に備ふ。時に細川忠興大坂に在り、素より徳川前田の兩氏と善し。兩氏難を構ふるときは天下の大亂に及ふを憂ひ、禍を未然に防かんと欲し、利長卿の爲めに家康に說き、又た使を金澤に馳せ、利長卿に勸むるに、重臣事に堪ゆるものに命して代はりて家康に詣り辨疏せしむることを以てす。卿忠興の言を納れ、旨を國老横山山城守長知に授け、大坂に赴き和平を謀らしむ。長知忠愨にして才あり。家康に謁して利長卿の異圖なきを

說き、折衝大に努む。家康意解け、卿に需むるに母芳春夫人を出して江戸に質たらしむることを以てし、又た長知の請を容れ、其子秀忠の女を以て卿の嗣子利常卿に嫁せしめ、以て和親を固くすることを約す。是に於て難遂に解く。實に慶長四年冬なり。時に秀忠二女あり、長千姫年三歲、次子々姫是年春生る、倶に家に在り、子々姫即ち天德夫人なり。

參照

杉本義隣覺書

一慶長四年初冬より凶徒石田か黨大坂にて虛言を吐て兎角利長公を神君へ讒し既に加州へ御進發可有之由天下に其隱なし然とも利長公は秀頼公に對し可企野心道勘以雖無之、神君此思召の上は不及是非とて俄に金澤廻りの惣

構を築き（私曰惣構の堀何茂二十日に出來と也）頻に籠城の用意堅固なり、神君思惟し玉ふは東に景勝北に利長楯籠ては及大亂又當世の人の心も無覺束けれは飽饜の御心地依有之利長公には越中一國を被退秀賴公へ御詫和順可然由被仰達就夫同五年の春、利長公の家臣横山大膳（後號山城守三十三歳）爲使節、神君へ可申達口上の品々巨細に被仰含此上にも於無承引は畢竟汝分別を相究伏見に在之母並妻を刺殺し屋敷に火を掛可自滅予は於當城天下を引請思儘の遂鬪戰潔く可討死其段可心易旨被仰含大膳謹て御口上を具に承り加樣の大事の御使若輩の私に被仰付事生前の面目武名の冥利に相協難有奉存候此上は兎角に、神君と御和睦被遊諸事御順可然奉存旨申けれは利長公も最也何事も不如無事との御挨拶にて大膳に盃を被下頂戴す其上種々懇意有て慶長五年二月二日大膳發足す斯て大膳到伏見利長爲使者參上之旨達御聽けれは井伊兵部被仰付御廣間へ大膳を召屏風を隔て口上之趣聞召けり大膳申上けるは利長秀賴樣に對し狹逆意樣に被聞召上之由凶惡の者の讒言を被聞召上候哉𢫨以不存寄義御座候第一

大閤樣御逝去之節御屋形樣と利家に御遺言依之去春利家死する前迄大坂に相詰隨分秀賴樣へ遂勤仕其故家督利長相續仕母妻爲人質伏見に置何の故を以て企野心秀賴樣へ疎略可仕候哉然處越中一國返上仕御侘可申上旨被仰渡且以不能存心候彼國と申は利家鎗先を以かせき拜受憒成御墨付茂御座候得者今更身の誤努々存よらさる所に返上仕御侘可申上覺悟無御座候緣者浮田を始石田に與し御幼君樣をかろしめ奉て虚言を吐て大坂騷動仕先棟渠景勝を御退治被遊樣に相聞へ候内々利長も角存寄所に候得者御同座仕け樣の凶徒を伐滅し秀賴樣の御代永々傳り大閤樣の御迹御繁榮の御相談をこそ奉願處に不計佞惡の逆言を被聞召上越中を可退被仰聞近比無御情被奉存候利家死期にも御屋形樣へ利長事諸事御指南奉賴置條勿論利長も聊以疎意に不存可致順隨旨被申置候此趣を以て於被聞召屆は利長安堵忝可奉存旨言葉に花をさかせ委細に申上けれは大膳言上の通被聞召入候て後退出す跡にて伺公の諸大名殿居の人々大膳體を見聞ていまた若年なるか斯樣の大事の口上を

一言前後せす辨舌と云男と云流石天下の陪臣一二といわれし者聞しよりも勝れたりと佳名を擧たり扨重て大膳を召御直に被仰渡けるは利長の斷秀頼公へ達し向後彌以互に無疎意可申通越中の義は如前々可然由にて御內書被渡ける此上は芳春院殿を於同心は江戸へ同道可有之又內室の事は大膳同道可能歸由被仰渡けれは忝上意の旨謹て畏奉存候委細に可申聞由老母事は定て可任御意と御請申上少退て井伊に向て申けるは恐多申上事に候得共御機嫌宜奉存故に言上仕候秀忠樣の御姬君樣御兩人被爲入由御一人利長嫡男犬千代丸（利常公の御事也）に被下樣に申上度旨申けれは則神君以の外御喜色にて尤可然思召候利長に對顏迄は可爲延引先大膳と御祝義可被成とて御盃を被下青江の御刀頂戴し御暇被下退出し玉泉院樣の御供仕金澤へ歸入す利長公御歡御家中上下萬歲を唱慶事不及言語去程に土方勘兵衛は常州に逼塞有之を御宥免有て被召寄是利長公のいとこ也加州へ被遣芳春院殿を江戸へ可伴具彌以無別心關東へ被順候樣に時々加異見可申旨被仰渡加州へ來り芳春院殿も江戸へ御下向依之秀忠公の御姬君も加州へ御入輿有て無事に成事偏に大膳申上樣の宜き故也と云々。

五年夏抄、芳春太夫人江戸に如く。後數日家康意を決し、自ら往きて上杉景勝を征す。秋關ヶ原の役起り、東西兩軍交々援を利長卿に求む、卿家康に應し、兵を出して丹羽氏、山口氏等と戰ひ、連りに捷ちて、九月二十日大津に抵り、家康に會す。家康卿の勞を謝し、且客歲天德夫人遺嫁の盟を尋む。翌月十七日家康其臣榊原康政をして卿の大坂邸に來り、關ヶ原役の戰功を賞し、卿に丹羽氏及山口氏の舊封（加賀國江沼能美二郡及石川郡內四萬石）竝に能登一國を加賜するの命を傳へしむ。蓋し其意以て天德夫人來嫁の納采となす也。

参照

利長卿贈村井長賴書

尙々いんしんまてに金子一まいまいらせ候御供にて下給い候べく候。
わさと申入候依こんとほねおりふんとして大ふ様より加州二かうり被下候かたしけなく候それにつき我等おとゝさるに中なこん様ひめきみ様を給り其しうきに御うへ様へしんし上の物御禮其方もちて可參候又々かうしつ殿とうねん中御下候やうにと存候へ共いまた其さたこれなくめいわく申候田中本田さとにもよく申候へく候われ〳〵四五日以前に御いとま候て下申候かしく。

十一月十日　はひ

ふんこ殿參る

利長公御代之おほへ書

一、大阪にて中納言様と御ゑんへんひめ君様を犬千代様へ御越に相極さかき原式部少御使にて能美江沼二郡犬千代様へと御意にて御拜領其まゝ小松をお犬様御取候肥前様御大慶にて中納言殿へわたり墨の御馬あかり申事。

按するに豐臣氏の末造、關ヶ原、大坂の兩役を經て、海內諸侯、祀を絕ち、封を減するもの、實に十を以て數ふへし。若し爾後德川氏執政の時を通算せは、更に相倍蓰するのみならす。此時に當て、前田氏隱然一大敵國を以て、終に能く其毒手に罹るを免るるを得たるもの、固より利長卿の遠識、芳春太夫人の隱忍、其原因をなすありと雖も、假令し當時天德夫人をして在らしめす、

縦とひ在るも前田氏に來嫁せしめす、縦とひ來嫁するも琴瑟相和せす、多く公子女を產育せす、不幸其姉千姬と運命を同くする如きことあらしめんか、前田氏豈能く幕府二百五十年間を通して其隆運を維持するを得ん乎、其能く此に至りし所以のもの、一に天德夫人の在るありしに由る。然らは則ち夫人か前田氏の家運を暗祐冥護したるの功豈偉大ならすや。故を以て、唯ゝ前田氏君臣のみならす、下も領國衆民に至るまて其德を欽仰して已ます、其景慕の情、藩政既に廢する五十年の今日猶ほ新たなるか如きを見るもの、亦宜なりと謂ふ可きなり。

第五章　天德夫人の入輿

慶長六年七月朔天德夫人前田氏に來歸す。家康其臣大久保相摸守忠隣、青山常陸介忠成に命し、送りて金澤に至らしむ。夫人時に年甫めて三歲。從ふもの安藤對馬守重信、伊丹播磨守康勝、鵜殿兵庫助某、醫久志本式部、並に附家老興津內記忠能、用人由比民部、矢野所左衞門、矢部覺左衞門、神尾彥右衞門、入江長兵衞、青木善左衞門以下傅母、醫師、庖人、鷹匠等に至るまて、其數實に數百人に上ほれりと云ふ。就中狂言師酢屋權七なるもの、銀冠朱服、奇裝絢爛、日に輿側に侍して歌唱舞蹈し、以て夫人を娛慰す。是の行途を東海道に取り、日を經ること九十日、九月晦日に

至り始めて金澤に達す。一日の行程約一里有半に過ぎす。沿道諸侯皆競ふて供張し、道路橋梁を修築し、亭館驛傳を増設し、送迎候問、欵待至らさるなし。其豪華殷盛、從前旅行の未た曾て有らさる所なりと云ふ。蓋し家康新たに關ヶ原の役に捷ち、一擧覇權を握り、威望海內を壓す。而して始めて大諸侯と婚姻の慶ありしを以て也。

参照

三壺記

慶長十年には秀忠將軍之御任槐之節犬千代丸殿御元服松平筑前守利光に被爲成六月廿八日に御家督被進則江戸より姫君樣御輿入に定り別而金澤御本丸に御新造に御屋形を建させ給ひ其美麗成事筆紙に難及御迎之大名小名役役相極御祝儀之裝束御一門御老中より足輕長柄に至迄夫々に拵て何茂手合手合に依相渡其拵に細工人町方以下迄萬歲を唱富家の催し無申計子持筋にかちん染の上下羽織幾千萬雲霞のとく走廻り江戸御發駕は七月七日に究大久保相摸守忠近青山常陸助忠成者惣御供中之下知を下し上通り金津之上野まて被參金澤より前田對馬奥村因幡同伊豫村井豐後横山々城神尾圖書淺井左馬其外役人不及記御前樣之爲御家老奥津內記御用人に由比民部、矢野所左衞門矢部覺左衞門、飯山庄兵衞其外に御歩行御料理人下々男女に至迄江戸より數百人御供に而新丸石川御門之外に江戸町とて長屋を建置進退順て札を打て馬下より移るゝ江戸より加州迄之道筋は掃除を究め橋を掛け五色の砂を敷一町々々に茶屋を立國々の大名衆奉行人を出し走廻り傳馬人足自由に而旅行の心は更になし越前は御伯父參河守殿御在城近江路まて取出ての御馳走也金津之上野に而受取渡規式相濟路次中御慰として酢屋權七に裝束させ銀の烏帽子に朱の丸眞紅の打紐房を下てひたゝれにて御輿之先に小歌を

諸物の眞似して御供也其の外音聲能狂言大夫吉田くつし龍た川の歌つはきはき谷川の椿と身を振頭をなけ躍續て御供す惣而御供の上﨟網代駕輿丁まて百丁と究まり御臺所御用人、役所人等肩方に乘して來るもあり騎馬に乘して來るも有百二十五里の道すから上には賓萊王母か百味を備へ下には飯の山つき献上進上使者飛脚織かことくに打續宿々の者共も一期に見もせぬ菓子肴敷かことくに頂戴して後日迄も悅奉る也。

天寛日記

一台德院殿之姫君（于時三才）羽柴肥前守息犬丸へ御よめ入御入輿加州に入て松平筑前守利光に嫁し給ふ大久保相摸守忠隣青山常陸介忠成是を送り奉る安藤對馬守（五左エ門榮松）重信伊丹喜之助康勝（後號播磨守）鵜殿兵庫頭（助紀（醫師紀年錄（年寛系））久志本左馬介（助紀年號）等奉供す爲御迎家老飛田對馬越前國金律迄罷出於爰大久保相摸守乘輿を渡し前田對馬守（利光家臣紀年錄長種青山家譜）是を請取る青山常陸介（忠成青山カフ）御貝桶を渡す長九郎左衞門尉（以上寛系前田傳青山カフトモニ同シ）是を受取（此姫君三男五女ヲ誕生ス長男筑前守光高次男淡路守利次三男飛驒守利治長女森右近大夫忠政ニ嫁ス三女松平安藝守光成ニ嫁ス四女八條智仁親王ニ嫁ス二女五女早世ナリ。）

家忠日記

廿八日加賀羽柴肥前守子息へ大納言樣（秀忠公）御息女樣御よめ入（三才）御供之衆大久保相摸守青山常陸介安藤對馬守（御使番衆）伊丹喜之助鵜殿兵庫頭御肩守醫者久志本式部加賀より爲御迎家老前田對馬長九郎左衞門越前の金津迄罷出御輿御貝桶受取申候（當代年錄。）

前田家雜錄

態致言上候仍江戸大納言樣御姫君樣御猿樣へ御祝言之儀目出度奉存候尤罷越御祝儀可申上之處南部表一騷小々蜂起之由に付而下人數可相働之旨被仰出候間當國人數庄內邊迄罷立候就其拙者或は出陣仕候條乍存以使札申上候

隨而御太刀一腰御馬代黃金壹枚幷紅花百斤致進上之候委曲橫山大膳殿迄申入候間可被得尊意候恐惶謹言。

九月廿七日　村上周防守賴勝

利長様

人々御中

是より先利長卿金澤城內本丸の地を相して、天德夫人の爲めに新殿を築き、輪奐の美を極む。又た新丸の中に附家老興津內記忠能の邸を造り、別に城外蓮池一帶の地を劃して、宅舍數十を造り、以て用人以下に賜ふ。當時之れを江戶町と稱す。八月下瀚夫人將さに越前の境に入らんとす、報到るや、利長卿國老長九郎左衞門連龍、前田對島守長種をして越前金津に赴き、之を迎へしめ、尋いて其賀越の境を踰ゆるの報あるや、躬ら亦た出てゝ遠く之れを手取川畔に迎へらる。村井又兵衞、橫山左兵衞、奥村主殿助、大音主馬助以下、近臣二十人、袪服盛裝、驢を聯ね之れに從ふ。國中喧傳、出てゝ途に拜するもの堵の如し。

第六章　良妻賢母

天德夫人既に新館に入る。其教養訓育の方法、師傅以下左右侍婢の精選等、細大備悉、蓋し大に見るへきものありしならんも、惜むらくは史書闕佚、今一の徵すへきなし。蓋し舊藩時代に在つては、何れの藩國を問はす、後宮の事は一切嚴秘に屬す。殊に加賀藩の如きは、紀綱尤も振整せりと稱せらる。故に後宮夫人に關する事の如き、巨細を論せす、外間に流傳する極めて稀れにして、其書に筆して世に傳ふるものに至ては、殆んと絕無と稱す可し。隨て徽言懿行ありと雖も、人をして贊揚褒顯するに由なからしむ。遺憾實に深甚となす。然れとも汎く當時の狀勢

天德夫人玉泉夫人に呈せられし書翰

是亦た綱紀卿の採集に係る。其書の年月詳かならすと雖も、上揭芳春夫人に呈せられしものと、略ほ其時を同ふするか如し。彼此相參照して當時婦姑祖孫和樂輯睦洋々春風の如きの狀を想見すへし。譯文下の如し。

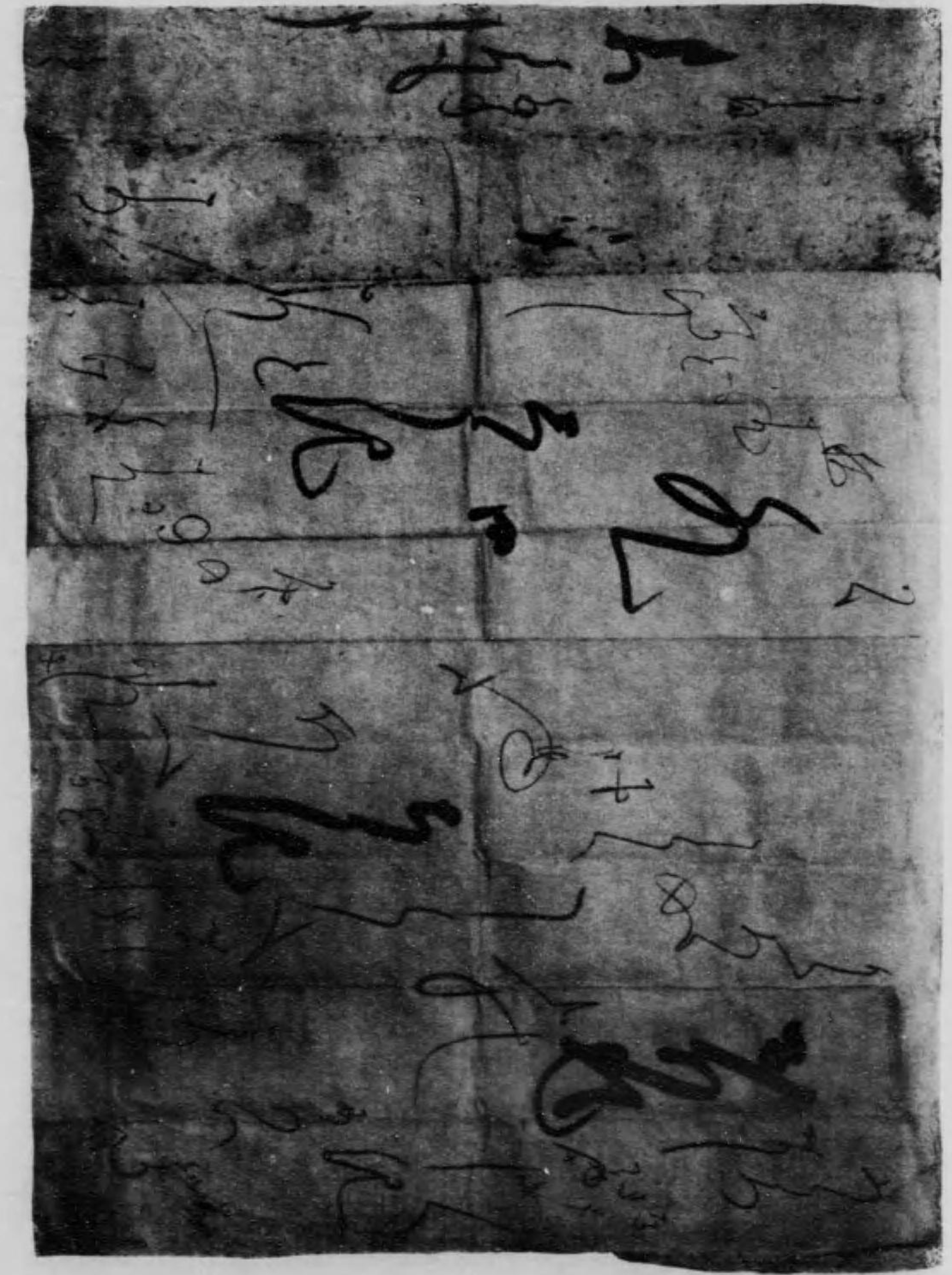
萬御とりまきれにておはしまし候はんと思ひ參らせ候にかやうの御事にまて御心つけ一しほ思ひまいらせ候かしく

おほせのことくちかきほんにて御禮御しうきとしてうつくしきにほひふくろおもしもくろくのことく下され候いく秋まてもと思ひ參らせ候かしく

禰ゝより

御かもしさま御返事

たれにても申たまへ



を察するに、芳春夫人尚健在せられ、賢明にして善く兒孫を愛育せられしも、前年既に江戸に徙らる。利長卿の室玉泉夫人は、織田信長の四女にして、天德夫人の從姨（母の從父姊妹）たり、其族屬既に疎ならずして、而して親生の子なし、想ふに其天德夫人に於ける鍾愛撫育、殆んと其所出に異らさるものありしならん。而して夫人七歲の時、利長卿富山に移らるゝや、玉泉夫人亦た之れに從はれしものゝ如し。其他、利常卿生母壽福君、及前田長種室幸子（利家卿の長女にして利常卿幼時之れを鞠育す）村井長次室千世子（利家卿第七女）ありて、其人皆賢名あり、天德夫人の學德を陶冶するに於て、各々皆其勞を效し、其力を竭せしならん。或は之れを天德夫人の遺墨に徵し、或は之れを當時の事情に稽へて、其教養の由て來る所、決し

て偶然にあらさるを知るなり。慶長十年六月、利長卿告老し、利常卿封を襲く。時に利常卿年甫めて十三、天德夫人僅かに七歳のみ、未た華燭の典を擧けられす、爾後七年を經て、始めて婣を畢へられしものゝ如し。十八年春、夫人年十五、始めて女兒を擧けらる。爾後九年間頻年弄璋弄瓦の慶あり。凡て三男五女、即ち左の如し。

一	長女	龜鶴	慶長十八年三月九日生	天德夫人年十五
二	長男	光高	元和元年十一月廿日生	年十七
三	次女	小媛	二年生	年十八
四	次男	利次	三年四月廿九日生	年十九
五	三男	利治	四年生	年二十
六	三女	滿	五年十二月十五日生	年廿一
七	四女	富	七年正月二日生	年廿三
八	五女	夏	八年三月三日生	年廿四

世子光高朝臣は眞に不世出の資にして、文武全才、其德、智仁勇を兼ね、事業青史に赫奕たり。利次、利治の二君亦た絕倫の質を抱き、實に富山、大聖寺二支藩の祖となる。龜鶴（美作國主森忠政世子忠廣室）、滿（安藝國主淺野光晟室）、富（八條宮智仁親王妃）の三公女並に皆令名を貽せり。夫れ天德夫人、性行、既に之を書史に覽るを得すと雖とも、其父祖、昆弟宗族母黨、英偉非常の材頗る多く。所生亦た擧て超群非凡なるに視れは、天德夫人の決して尋常裙釵の流にあらさりしこと、殆んと復た疑を容れさるなり。

天徳夫人利常公と伉儷尤も篤し。而して其内助の功一も舊記に記するものを見す。然れとも是時海内始めて砥平し、前田氏創業既に成り、守成の事漸く將に興らんとす、内外極めて多故なり。慶長十九年五月利長卿高岡に薨す。六月芳春夫人江戸より金澤に歸住す。十月大坂冬の役起り、翌年四月再ひ夏の役起る、兩役各々利常卿兵二萬五千を率ゐて之れに臨み、我軍奮鬪、戰功尤も著大なり。元和二年三月利常卿駿府に赴く。四月家康薨す。三年五月將軍秀忠利常卿の江戸辰口の邸に臨す。六月卿將軍に陪して京師に朝す。七月芳春夫人金澤に薨す。六年金澤城災す。七年之れを再築す。五月世子光高朝臣、次子利次君と偕に江戸に之き。將軍秀忠及崇源夫人に謁す。凡そ是等の事ある

利常卿大坂役の戰捷を報せられし書翰

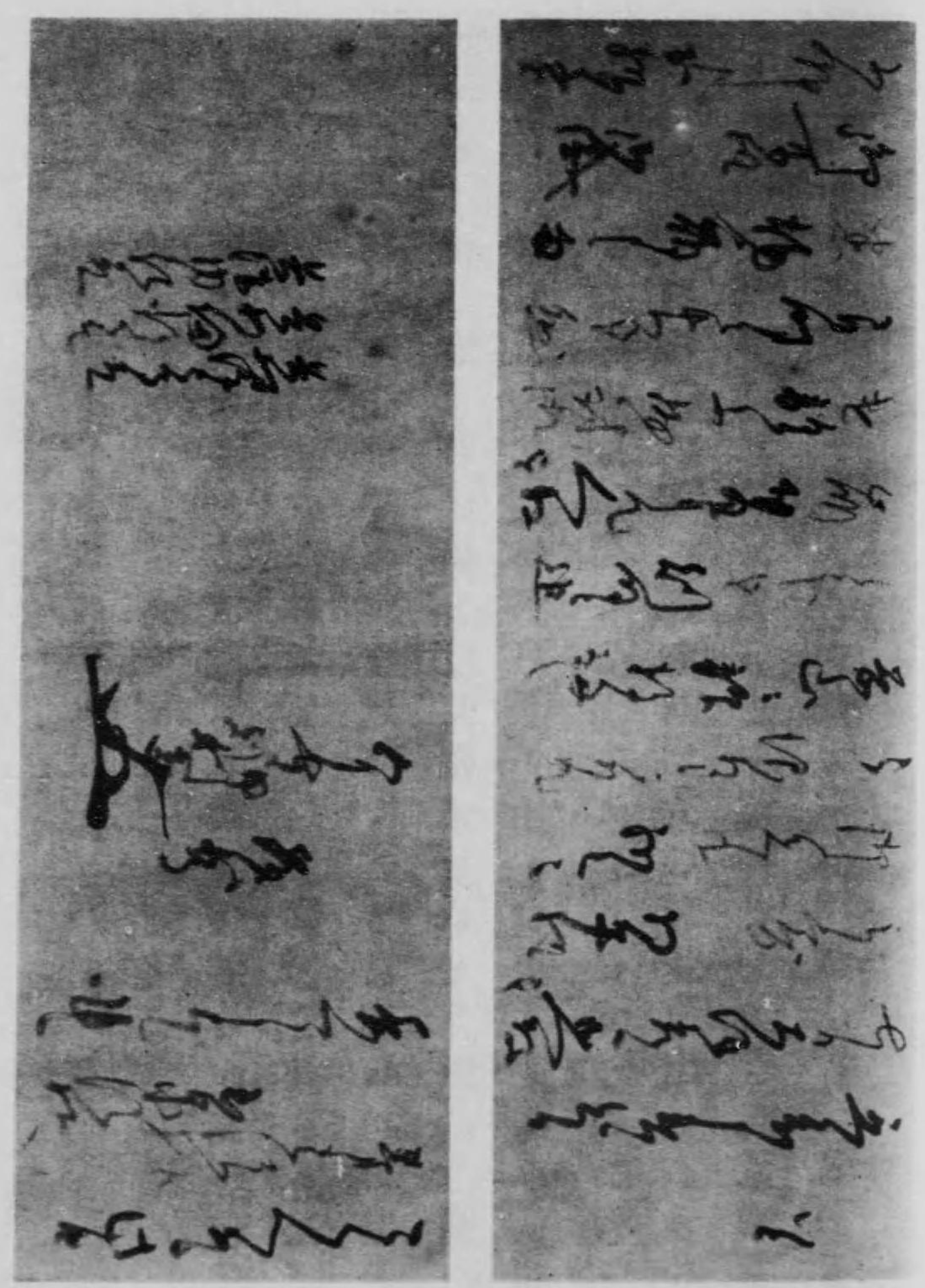
元和元年四月大坂夏役起る、利常卿士卒貳萬五千を率ゐ、赴きて將軍家康を援く。家康、卿に先鋒を命す。五月七日卿軍を岡山口に進め、敵將大野治長と戰ひて、大に之を破り、追擊して大坂城に薄り、火を牙城に縱つ。城遂に陷る。斬首三千三百餘級。家康大に卿の功を賞す。卿陣中筆を執り、即日戰捷を金澤に報す。本書、即ち是也。文に曰く、

急度申遣候今日七日大坂表へ御人數を被寄將軍樣御先手我々に被仰付候に付て岡山に敵數多有之候分を即時に追崩本丸まて人數を遣敵不殘討取候即時に火を懸悉燒崩申候兩御所樣御感不斜候於拙子者可御心安候此由芳春院樣玉泉院樣へ委可申上候　謹言

五月七日申刻　筑前守利光判

奥村伊豫守殿
奥村備後守殿
與津内記殿

是れより先き、利常卿金澤を發するや、天徳夫人憂念措く能はす、左右に命して、卿及生家父祖の平安を神佛に祈らしむ。而して、前年冬役に際して、附家老與津内記をして、幣を封内粟殼八幡宮に奉せしめられしこと、本文錄する所の如し(五八頁參照)。利常卿大坂の戰捷を金澤に報するに當て、特に與津内記の名を列せられしもの、亦以て其琴瑟相和するの一端を察するに足る歟。



毎に、必す著しく天徳夫人の歡欣悲戚を動かさゝるはなし。而して加賀藩提封諸侯に冠し、上下嫉視既に久し、利常卿英雄の姿、豪放不羈の行多く、動もすれは人の意表に出つるものあり、時としては幕府の嫌疑を受く、夫人將軍公女を以て、善く其間に處し、前田氏の爲に效す所ありしもの蓋し多からん。其勢必す思を焦し、身を苦しめ、食して膳を甘んせす、寢ねて席に安んせさるに至り、心を傷め神を駭かすこと常度の外に超ゆるものあらん。思ふに夫人の終始翼々以て婦節を效さる、其德洵とに欽す可し。然れとも其終に不幸短折に至れるもの、亦焉んそ平素精神を過勞したるもの、之か一大原因をなしたるにあらさるを知らんや。嗚呼哀む可き哉。

參照

寛政重修諸家譜

輿津忠能　內記　母は長門某か女

幼年のときより台德院殿につかへたてまつり慶長二年遺跡を繼五年關ヶ原の役にしたかひたてまつり凱旋ののち御使番となり六年珠姬君前田家に入輿ののち附屬せられ元和八年逝去によりめされて江戶にきたるこれよりさき加恩ありてかつてたまふところの采地をあらため下總國香取葛飾、上總國武射長柄、相摸國大住、武藏國榛澤六郡の內に於て千七百三十石餘を知行す九年九月十九日死す年五十二法名常照麴町の西念寺に葬るのち此寺を四谷にうつさる後代々葬地とす妻は河村善右衞門重忠か女。

金澤古蹟志

輿津內記忠治舊第

象賢記略に大聖寺賁の明年九月江戶より姬君金澤へ御輿入云々三壺記に云御前樣御家老として輿津內記御用人として由比民部矢野所左衞門矢部覺左衞門其外御步行料理人等御供にて江戶より罷越新丸及石川門外に江戶町とて長屋を建置れけるとありて右は慶長六年也三壺記等十年に係るは誤なり三州志來因概覽附錄に云江戶町とは今の蓮池の地也按に御附家老輿津內記一人は新丸に居し御用人以下は江戶町に貸家渡り住居せしなるべしといへり又象賢紀略に其明年十月晦日御城天守へかみなり落申と見え三壺記に雷火にて御本丸御新宅悉燒失御前樣竝女中宇喜津內記屋形へ入奉り其外の女中は中川宗半へ入二三の丸竝新丸の大名衆へ銘々に御父子共入らせ給ひけり又云元和六年十二月二十四日の夜御城中奧方より出火御前樣姬君若君方三の丸宇喜津內記屋敷へ入らせられ利光卿は北の丸山崎美濃屋敷へ御入被成云々三州志來因概覽附錄に三壺記及山崎家傳に此時御前樣等三丸宇喜津

内記屋敷へ被爲入とあり按に爰に三丸と書たるは三丸の外と書へきを外字を落字せし成へしと自註す平次按に興津內記は實名は忠治といへり越中礪波郡埴生八幡宮に內記在判の奉書あり其寫左の如し。

己　上

一書令啓候然者兩御所樣筑前樣御三人御陣之御祈禱從上樣被成度之由被仰出候間其元於御神前御祈念候而御札守可有御上候此度之義に候間隨分被入御情候事肝要候尙追而可申入候恐々謹言。

慶長十九年十一月廿四日　興內記忠治判

埴生神主殿御宿所

又古定書中に載たる慶長廿年卯月三日本多安房守横山山城守兩人より金澤町肝煎宛の金澤町中役儀個條書に左の如く載たり。

一、上々樣より御買物被仰付候は山城守切手次第可相渡候從御前樣御買物之義は興津內記切手次第たるへき事。

三州志鞬櫜餘考の頭注に云滕臣興津內記承官由比民部矢部覺左衞門矢野所左衞門四人共夫人歸岱の後皆我臣と成興津內記の後は外記と云て寬永十七年利次君の從臣と成富山に行たり興津內記は元和六年の記に無役衆の內に二千石とありといへり平次按に元和二年の士帳にも無役衆の內に貳千石興津內記とありて天德院君在世の時より吾藩士に列せられたり舊藩中金澤町奉行支配細工人に興津某といふあり此由緒書に興津內記の子孫なるよし記載す富山の興津氏の別家ならんか。

江戶町故跡

此地は即ち今茶店の家屋を連擔せし元馬場の地邊にて舊藩中蓮池と稱する地內也三壺記に云慶長十年七月利光卿の御籠中江戶より御入輿御前樣御家老として興津內記御用人として由比民部矢野所左衞門其外御步行料理人下男共に至まて江戶より數百人供奉し來るにより新丸曁ひ石川門外の外に江戶町とて長屋を建置せられ此長屋へ入られたり平次按に江戶人をは入置け

るにより江戸町とは呼へるもの也但し慶長十年七月とするは誤也村井長明の象賢紀略に關原の明年九月江戸より姫君金澤へ御入輿と見ゑ家忠日記烈祖成績武徳大成記等の記錄共に皆慶長六年九月に係たりさて三壺記に寛永八年四月十四日金澤火災城内本丸の殿閣延焼の餘煙江戸町を焼拂ふて田井口まて悉く焼失すと見へたり富田景周の蓮池考に此蓮池の地は天徳夫人御入輿以後江戸町とて關東より御附の人々の小屋此所にあり又年譜に萬治二年七月此地に作事所を建つとあり此作事所出來の頃は最早關東よりの御附人もなく小屋も取拂後の故なるへしまた延寶四年に作事所を轉地せられし舊地に座敷を建させられ貞享の頃まても以前の遺名にて江戸町御亭なとゝ唱へりといへり三州志來因概覽附錄に云江戸町とは今の蓮池の地なり古圖に新坂口より安房坂の終りまて二百三十間許の間なり有澤武貞の甲寅圖說に江戸衆の居たる屋敷跡を江戸町と云ふ今の蓮池露地の御亭ある邊とあり但し御附家老與津內記一人は新丸に居し御用人以下の人々は江戸町に貸屋渡り爰に住居せしなるへし又云其後此地に亭を造作命せられ貞享の頃まても此亭をは江戸町の亭と唱へりといへり不次按に貞享の後は江戸町の舊稱も絶たりけん年譜等に蓮池の御亭或は蓮池御屋敷或は蓮池の御殿なとゝありて廢藩の際まて蓮池とのみ呼へり。

本丸新殿造營

三壺記に云慶長十年江戸より姫君の御輿も入參らせんとの上意に付て金澤御本丸に新造の屋形を建させ給ひ其美々敷事筆紙の及ふ處にあらす御迎の役役相究り御迎參りけり江戸御發駕は七月朔日に究り大久保相摸守忠近青山常陸介忠成御供にて上通り金津の上野迄參る金澤より前田對馬守奥村伊豫守村井豐後守横山々城神尾圖書等御前樣御家老として輿津內記御用人として由比民部等御供也云々按に右は慶長六年の誤り也家忠日記烈祖成績武德大成記等皆六年とす又入輿を七月とするも非也村井長明の象賢紀略に關原合戰破れ大府公御上り候ゆへ肥前樣大津へ御越御對面大坂にて中納言樣

ひめ君様を犬千代様へ御ゑんたん相極明年九月江戸より姫君様金澤へ御輿入御迎に肥前様手取川まで御越候姫君様御供大久保さかみ殿青山ひた殿鵜殿兵庫青山善左衞門其外少身衆多越前金津上野にて御輿を取渡しの時前田對馬守御輿を請取被申とあり三洲志鞬橐餘考にも慶長六年辛丑九月晦日台徳大君の翁主東海道を歷て金澤に來嫁す大久保相摸守忠隣青山常陸介忠成是を奉送す安藤對馬守重信伊丹播磨守康勝鵜殿兵庫助曁ひ醫官久志本左馬助扈從し來る我卿大夫前田長種長連龍越前金津の上野に迎ふ忠隣玉輿を長種に遞し忠成貝桶を連龍に遞す越前より奧村永福村井長賴横山長知神尾之直等護輿金澤に到る我世子自から城外へ出迎ありと寛永系圖傳に云ふ慶長六年九月晦日台徳院殿姫君御輿入加州爲利常室家とありさて右新殿は三州志來因概覽附錄に慶長六年天徳夫人入輿により本丸に新殿を建て夫人之に居給ふ此殿を新宅と稱す當昔質素の風俗推思すへし然るに翌七年の火災に新殿炎焼元和六年の災にも亦炎焼す其時々夫人は新丸の奧津内記第へ轉座

あり、又云長連龍第も本丸にあり有澤武貞享保甲寅筆記に長如庵第本丸にあり新宅出來の時其地狹しとて如庵へ今の第の家作を命せらるとありと平次按に右は誤なり武貞の金澤圖譜に寛永八年に二丸に新宅出來の時長如庵今の屋敷の家作ありと見へたるを見誤りたるもの也。

第七章　薨去

元和八年季春夏姫生る。産後夫人體氣佳勝ならず。夏に迨ひ疾益々劇なり。利常卿憂虞措かず。遍ねく良醫を覓め、遠く之を京師に聘す。社寺に祈禱し、身病床を離れず、慰劬至らさるなし。而して醫藥効なく、七月三日終に瞑す。年僅かに二十四。利常卿哀慟して暈倒すること二次に至る。蓋し其平生陰賛の功を追念し、悼惜の情に勝へさるなり。擧國喪を聞きて震駭し、哭聲路に載つ、延て域外の民に及ひ、痛惜せさるはなし。八月八日葬禮を城外小立野上野の地に行ふ。其儀極めて盛大なり。佛諡して天徳院殿乾運淳貞と曰ふ。遺骨を金澤と高野山とに分瘞し、（金澤天德）

野田山の墓

天徳夫人の墓は、始め金澤天徳院域内に在りしも、夫人五十年の忌辰に際し、綱紀卿之を野田山利常卿の墓の附近に移されたり。

院の墓は寛文十年野田山の塋域内に移す各々一寺を設け、並に天徳院と號す。歴代藩侯崇敬極めて篤し。其金澤天徳院を創むるや、幕府に請ひ、宗門の亘擘泉滴禪師を延きて開山とし、高野山天徳院を創むるや、遍明院主覺雄を以て第一世とす。覺雄碩學の名あり、後高野山第二百三十二世の山主となる。兩寺倶に鉅匠輩出し、蔚として名藍たり。而して遠近士女深く天徳夫人の功徳を欽仰し、歳時に詣拜する者、今に至り尚ほ衰へすと云ふ。

參照

三壺記　利光公御前様御遠行之事

元和八年の三月三日御前様姫君様御誕生被成けるか御産の後御違例爾々無

御座諸人心肝をなやます事不過之江戸金澤の其間晝夜のさかひなく人馬の通ひ止時なし神佛の御祈願八大王奉驚醫療の法は醫王善逝の瑠璃の壺の底を拂ふ京都爐菴延壽院召下御櫓の下長局に御賄奉行脇田帶刀北川久兵衞勤之六月廿七日來七月三日歸京せらる誠生者必滅の掟上下不差御年廿三歳にて七月三日に終に御遠行被成けれは御國中暗夜のおもひをなす、十五歳にて初產被遊九歳の御姬樣を頭として七人の御子樣方段々に毎年御產此度の御產に姬君お夏樣にて御產後御煩終に畢らせ給ふ故つらきは此御姬樣と何茂申あへり能御若君達被成御座御年は御盛御果報は天下に無双なりさて〱と申て草木迄も悲になひく計に覺へたり

御葬禮之事

御遺骸をは當座に納奉り八月八日三十五日に相當る日御葬送に相極晝夜を懸て細工人數百人にて拵立小立野は金澤中の茶園のみにて廣き野原の事なれは今の御墓所に五間四面に九品蓮臺の火屋を建白土にて上塗し白綾水引を廻はし四本の柱白絹にて包其外構にやらひを結廻し發心修行菩提般若の四門を開き極彩色に色とりたる額を打て其間六町去て西の方に伽善堂を四間四方に立させ組天井に百花を繪き極彩色に四方に廻蔓多羅曼珠娑花天人かれうひん管絃の繪金石絲竹匏土草木の有樣有々敷繪き四方の軒に金銀のけまんやうらく風にひゝかせ金襴の幡にて柱をかくし其堂の眞中に八方龕を臺座に居奉り御龕は惣金にして蓮花の彫物金銀のふれうやうらくわらひ手に提て軒端にやうらく鈴を付風にひゝかし善の綱四筋六町の間幅六間に大唐竹にて垣を結六地藏を兩向ひに立六尺間に百目蠟燭銀たみ八角の柱に蠟かため七寸にして朱せい惣塗垣の內疊を敷其上に白布を閉合て敷詰たり諸宗の智識長老同宿幾千人七條九條のけさ衣爰をはれと出立て善の綱に取付笙ひちりき大鼓鉦鼓とら鐃鉢御經に交へて鳴渡し白絹の灯籠幡六なかれ十弐本に龍頭うこく計に作り付天蓋は惣蜀紅の錦に小幡等一色にして沉香の柱に火を付前後四ヶ所に爲持金銀に磨たる花籠に金銀のはくを切入三間

竿にて四ヶ所に立風にちりぬる切箔才川淺野川迄散り異香薫して花降とはかゝる事をや申らん御名代として御位牌香爐花立たいまつ等何茂かむりの裝束にて御一門衆被爲持御三人の若君樣上け輿に召れかせん堂迄御來臨有て善のもとつなに御手をかけさせ御いたゝき被成けれは御供中は不申及奉見人々一同聲を上流るゝ泪を袖にひたし御近所に有なから夢幻とも辨へすそれより御輿に召され火屋迄被成御座式次第相濟御燒香あそはしけり何れも御名代相添御介添御供の人々は五日十日は目をなきはらしてぞ居られけり寶圓寺伴翁の次尊雲堯和尙の御導師御戒名は天德院殿乾運淳貞大禪定尼と號し奉る夫より御法事品々不及奉記追付御菩提所御寺御建立被成則天德院と名付關東より泉滴和尙を請招有五百石寺領被爲付敎養修行の功申は恐有第三年忌には百五十人の大衆にて江湖を付させられけれは御郡中より野菜を持運ひ百日の御賄日々の御調菜筆紙の及所にあらす可有推察者也

金澤天德院

本寺は元和九年、利常卿天德夫人の爲めに創むる所とす。寺域三萬餘坪、壐田五百石、藩時加越能三州中最大寺院の一なり。元祿年間、綱紀卿明僧高泉に命して之を改修し、祖廟佛殿等を增建せしめ、又命して、篇額を書せしむ、曰く菅氏大宗祠と。本寺明和五年災に罹り、今舊態を存するもの、獨り山門あるのみ。

徳川實紀 元和八年

三日松平肥前守利常の北方加賀の金澤城にて逝去あり御歳は二十五御所第二の姫君(珠姫君又ねゝ姫君)なりやかて天德院と諡す城下に一寺を建立あり御法諡をもて寺號とす(寛政重修譜、紀年錄、家譜)四日諸大名群參して珠姫君の御ことを弔しまいらせ御けしき伺ひ奉る(續元和年錄)五日諸大名登營昨日のことし(續元和年錄)七日御喪制により星夕拜賀停廢せらる都下烟火戲を翫ふ者なし(續元和年錄)

頌文雜句

〇悼天德院殿乾運淳貞大禪定尼

粤賀越能三州之府君、天下將軍之考妃被結宿緣、誠浮世之榮花、天下有誰爭之、雖然天地裏、人間轉變、老少不定、難更難遁、嗚呼悲哉、元和八戊文月上旬初、被誘引秋

風、惡寂遭、示本宅、此訃音到處、無貴無賤、叫蒼天、泣無涙兮、哭無聲、木人呑氣、石女揩眉、予是雖爲鎭西之旅客、聞他人愁、何豈不哀悼之、則老涙濕却袈裟角、餘彌陀之寶號六字、或爲冠句、或爲履韻、尾綴順逆一圓之陋頌六篇、所以者何、四大終歸空、空是四大始也、謂之一圓、圓是宗門向上關棙子也、靈山云之正法眼藏涅槃妙心、少林曰之直指人心見性成佛、三世諸佛爲之頂相、歴代祖師爲之命根、在聖不增、在凡不減、生而不來、死而不去而耳、若識得這箇、稱秦國夫人之惡文、可達尼無盡藏妙理者也、若堂中有慈悲介妙主、一覧之、被投增天德院殿乾運淳貞大禪定尼淑靈前之傍、欣躍欣躍、伏乞照鑑、

南地日溫生萬物　唯心淨土存斯弗
塵塵刹刹本來顏　百億化身歸一佛
無量諸佛若恒沙　拈出靑蓮老釋迦
正法眼藏誰會得　破顏微笑屬頭陀
阿僧祇內得心奇　直至眞空伊是誰

頌文雜句

本書舊しく版本あり。其中收むる所の天德夫人を悼むの文は、未た何人の手に成りしやを詳らかにせざれども、其『予は是れ鎭西の旅客たりと雖も、他人の愁を聞き、何ぞ豈に之を哀悼せざらんや』の語あるを見れば、其當時の僧侶にして、前田氏と緣故あるに非るも、夫人の薨逝を聞き、哀悼して此文を作りしものなるを知るべし。

本寫眞の原本は美濃伊深正眼寺川島昭隱禪師の所藏に係る。

▲大山殿七年忌

佛陀拱手寒毛卓　六月紛紛雪満天

▲棹桃源　萬里

月落長安半夜鐘　此人逝矣奈吾宗

朝來別不誦神呪　丁盍跡泰和淚供

▲悼天德院殿就運淳貞大禪定尼

夫賓越能三州之府君　天下將軍之考妣

擬結宿緣識浮世之榮花　天下有誰爭之雖

然天地衰人間轉変老少不定難更難道鳴

呼悲哉元和八戊文月上旬初披訃引秋風

悪寂遺示本宅此訃音到處無貴無賤吁蒼

見見祖禪禪活法　燈籠籠上掛須彌
彌勒梵宮無自他　山河大地現遮那
花紅柳綠不凋相　死去生來叫與阿
陀羅尼咒轉須臾　虛谷聲傳聽更殊
曠濶大空千萬戶　扣門即荅趙州無
佛心充滿立禪庵　休罷萬杭須實參
花質紅顏斯幻化　黃金妙相露湘南

日本洞上聯燈錄

加州金龍山天德院亙山泉滴（圜泉滴本作僊滴一）禪師。武州人。自幼識見穎卓。登具後徧參諸老。咸無所證。抵長安。值嫡宗上堂。舉達磨不來東土。二祖不往西天語。平生礙膺之物冰泮。以所見呈宗。宗舉公案詰之。酬答皆愜宗意。宗曰。後來有人問洞上宗乘。以甚麼祇對。師曰。蘆花無異色。白鳥下汀洲。宗肯之。俾掌記室。未幾命首衆。分座說法。及宗遷

化。嗣補長安。大相國秀忠公。延洞門諸宿入城中。商推宗旨。師亦與焉。公數指目於師。蒙寵賚甚渥。由是名著。加賀黄門菅原利常卿。於金澤城創天德精舍。資冥福。將求哲匠住持。遂言相國公。公命師住之。師堅辭。公再告以卿意勤。不獲止應之。寛永辛己十月廿五日示寂。壽八十一。

高野山天德院代僧花藏院口達書

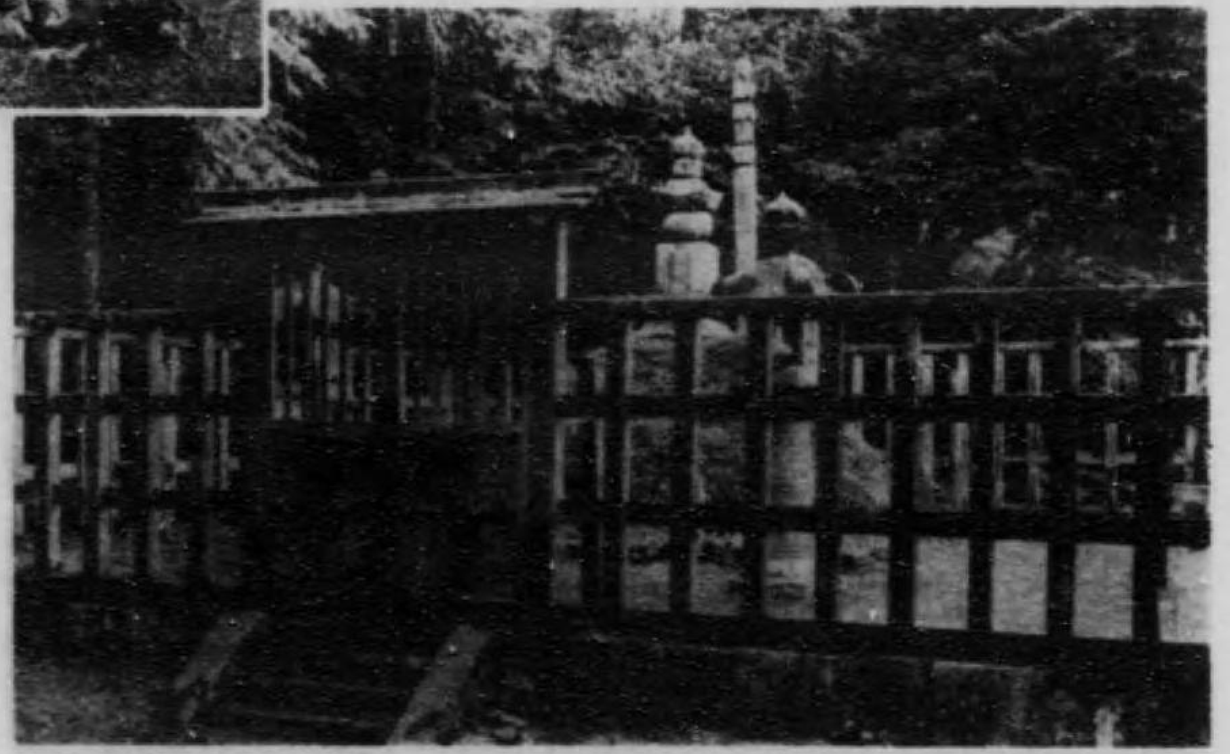
一高野山は峯は八葉の蓮花をかたどり谷は秘密の曼茶羅をあらはすゆへに三國無双の靈山本朝第一の淨土也諸佛菩薩常恒出現し諸天善神不斷に影向し給ふ故に眞言秘密の教法自ら此山に相應なるゆへ永く此に安置し本邦に弘通し給へと我宗祖弘法大師佛神の告を蒙り其由具に天帝に奏しけれは御叡感淺からす千歳の昔此峯を開き伽藍を造しめ天下國家の御祈禱且は御歴代の御神樂修行可仕御旨の奉蒙勅命尙亦莫大の御朱印被爲下置候天皇御信仰の餘り大師より諸法を御授御歴代萬々歳の御契約被爲遊當山へ御幸あらせられ候終に大師入定御歴代の帝皇御幸の節は山の麓より御一足三禮被爲遊或は御輿を御下り御陸にて御讀經念誦し御登山被爲在候薨御の上は御遺髮等の御納物御座候て御陵を築き御法會御執行の敕命を御下し時々過分の御朱印を御附被爲置候只今にても御連綿と御陵を築き御奉納物御座候依之昔より百官百士之御信仰も淺からす皆々御由緒御座候右當山へ御遺骨幷御遺髮等の御納物有之御石塔御建立或は尊牌を安置し御菩提を御營被爲成且又天下國家の御祈禱を御誓ひ被爲在候事は當山は金剛不壞の淨土にて諸佛諸神常に影向し法は諸宗をこゑて最上秘密眞言宗則神變自在の加持力尤も勝れたる所謂也然は尊靈の御菩提を此山に御執行あり國家の御祈禱をも被爲成候御利益不及申御儀に御座候且諸宗の祖師先德も宗意を明らめ間々眞言門に入當山に閑居の遺跡も有之或は授戒受法の由緒有之顯然の儀に御座候隨て何れの宗派にても皆當山にて菩提を營み申事に御座候(中略)

一天德院の儀は被爲在御承知候通徵妙院様厚當山御信仰被爲成元和年中天德

院境内を新に御求天徳院様の御牌名を以一字悉皆御位牌堂本堂護摩堂御靈屋鐘樓堂客殿庫裡長屋文庫土藏等御建立被爲成置其外世出世の諸道具に至迄新に御附被爲置右住職の儀も一山衆徒の中覺雄と申へ從微妙院様被爲仰付右の趣公廳に御達被爲成候御旨にて從公儀も御朱印三拾五石當山上通りの寺院並に被下置代々の住職も公儀へ繼目御禮申上獻上物拜領物御座候已に當山數千ヶ寺の内百餘ヶ院におよひ候上通り寺院の内公儀へ住職繼目御禮申上候は當山法談所六ヶ院と天徳院と都合七ヶ院に限り外寺院に其例無御座候右最初從微妙院様奉蒙仰候先格を以其後代々の住職も願遺書に認置候代替の節當山におゐて祿所の寺院立合遺書開封仕碩學兩院より連名の飛札を以願遺書の趣御當地寺社御奉行所へ御達し申上御窺の上太守様御意の御旨御返翰被爲成下候右御返翰の御旨にまかせ早速御國表又江府其節太守様被爲在御座候御地へ參上仕住職の御免奉蒙仰候其後公儀並淡路守様飛驒守様へ住職繼目御禮申上候先格に御座候諸侯様方厚御由緒の御菩提寺數多御座候得

高野山天徳院

文祿三年利家卿關白豐臣秀吉に從ひて高野山に登る。前田氏の山僧と相識りしは蓋し此時に始まれり。慶長十九年利長卿薨するや、利常卿其墓を本山に築く、規模甚た大なり。天徳夫人薨するに及ひて、卿西光院の故墟を購ひ、墓を高邱の上に建て覆ふに甍宇を以てし、輪奐の美を極む。而して新に一寺を創し、本堂、護摩堂、位牌堂、客殿、庫裡、鐘樓、山門、所化寮、文庫、土藏、稻荷社等を構へ、法印覺雄を延きて其開山となし、附するに田百石を以てす、事本書中に詳悉するか如し。其庭園亦た景致饒きを以て名を著はせり。



共皆以高野開山以來高僧先德の遺跡にて代替の節は一山の祿所より住職申付相濟候高野の山法を不用御檀主樣より住職被仰付候は天德院一ヶ院に限り餘院に其例一向無御座候故御當家の御威光を以一山内にても寺格も宜候又境内の儀も最初御建立の節寺地撰み被爲成候に付公儀の御寺青巖寺の表門前にて至て場所も宜又御位牌堂等の建物も相揃諸事美麗に御座候て諸人往來の見請嚴重に御座候故諸侯樣方御代參は勿論諸國より登山の人々に迄加州樣御菩提寺と相尋拜見に來り且又京都御内使並關東表寺より一山内へ相掛る御方御登山の節は一山の衆徒中より右の宿寺に被相願候程の儀にて乍恐御當家樣の御威光有之住職の面眉も宜御座候(下略)

紀伊續風土記

第二百三十二世寺務檢校法印覺雄(堯盛房 量壽院)無・土州の產幼齡にして根來寺一如阿闍梨に事ふ稟氣沖和精神爽利にして詩歌を好筆翰に工なり登嶺の後前檢

校實性院政遍に從て秘要を受け深奧を傳ふ弘教を專し傳燈を委す寛永八年正月十一日寺務檢校職に補す前檢校宥盛傳正辭職替執行代覺運尭眞房西覺院寛永十一年十二月日職を辭す治山四箇年同十二年六月三日入滅七十歳寺務の間、寛永九年正月十二日大樹君秀忠公御祈の爲金堂假殿に於て百壇を結構し一萬座藥師の秘法を修す開結導師檢校房一七箇日同二月廿八日台德院殿御菩提の御爲大曼荼羅供導師寺務覺雄職衆百二十口同十年二月廿一日御影堂落慶供養導師同十一年三月二十一日高祖大師八百年遠忌御影堂大法會十七日より三箇日夜の間例に任せて不斷勤行大衆皆參導師檢校片檀前官御房別記同七月十一日出京大樹君御上洛拜賀の爲となり同十二年東國下向上洛の途江尻驛に化と云云

紀伊續風土記

釋光宥但馬人、博涉內外之典籍、深究密家之玄旨、才善文章、巧臨池之藝也、元和七年、遍明之覺雄、管無量壽院門主、宥以爲雄也非棟梁才、況非門中、焉得爲門主乎、遂訴關東曰、神君治世之始、命曰門主者、爲一宗之軌範、宜取門中第一碩學任之也、然覺雄者、實性院門徒、而非吾門中、況乎學行無所聞、宥雖不敏、修學不耻當世、焉屈膝而從雄乎、庶早黜雄矣、時賀州大守與雄有因緣、屢爲雄內應、遂宥坐其言不遜、被放豆州、居配處二十九年也、一夕夢有神人、咏和歌曰、須久世與利、幾久佐乃多爾於宇惠越天、加古不麻賀幾仁、宇都之古曾須禮、宥覺後吟曰、以加波加里、寸起志多爾於加宇惠奴良牟、以未宇都之幾久、麻都能志多加瀨自爾、後深恐宿因、專修滅罪之行、常凝不生、深觀一年、書流浪記一卷、贈法明院乘教、其文古雅能盡流離之情、看者無不悲感也、慶安二年遭赦歸山、以蓮花三昧讓堯壽院賴仙、擲世事、練行修觀、後慕先師賴慶之芳躅、懸錫伊豆山、淨業功積、兼知死期、召門徒慇遺戒、遂以承應元年九月廿三日泊爾滅度、其撰述高野眞俗興廢記、豆嶋流浪記、各一卷、疏釋之論、稿數十帖、行于世、矣山史

1'1
580

大正十一年六月卅日印刷
大正十一年七月三日發行

著作者　東京市下谷區上根岸町八十二番地　近藤磐雄

發行者　東京市本郷區本富士町二番地　高木亥三郎

印刷者　東京市神田區美土代町二丁目一番地　島連太郎

印刷所　東京市神田區美土代町二丁目一番地　三秀舍

終